

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Acculturation : Communication-Network in Yap,
Micronesia : Face-to-Face Relationship using the
Bus-Services

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 繁樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003741

ヤップ島のコミュニケーション・ネットワーク

——バス交通が結ぶ face to face 関係——

小 林 繁 樹*

I. はじめに	割
II. ヤップ島概要	VI. コミュニケーション・ネットワークの成 立基盤
III. 伝統的な情報伝達方式	VII. おわりに
IV. 近代化、国家化に伴う変化	
V. コミュニケーション・ネットワークの役	

I. はじめに

本稿は、今日（1980年代前半）のミクロネシア、ヤップ島における人々の情報の伝達、コミュニケーションの様態について概観することを目的としている。

広い意味で外社会というものに対して独立のであったし、今日でもそうであるヤップ島では、近代化の過程で、情報伝達的手段としてラジオ放送に代表されるような間接的で公開的な通信ではなく、主に乗合バスを利用し、情報の送り手本人がその受け手へ直接、口頭で伝える、個人的なコミュニケーションの確立をめざしている。そして、ヤップ島でのバス交通は、伝統的な伝達方式の形態を踏まえながら近代化へ順応していく有効な伝達手段となっている。

普通、社会が近代化、国家化していく過程で、情報の伝達や通信手段は個人を単位とするパーソナル・コミュニケーションから集団を対象にするマス・コミュニケーションへと転換していく、と考えられている。それは、情報の直接的で相互的な交換、そしてその情報の担い手との直接的交流の形態から、情報の間接的で一方的な交換、担い手との間接的交流への変化でもある。一般的にこのマス・コミュニケーションには、必要悪視を含むマイナス・イメージが伴う。それは、情報の伝達は面接関係で直接行なうのが最もよく、それがコミュニケーションの理想的なあり方なのだ、という価値意識がある中で、近代化、国家化に伴ってマス・コミュニケーション化し、もは

* 野外民族博物館リトルワールド

やパーソナル・コミュニケーションの形態には戻れない、と思う気持ちのジレンマからきているものである。

しかし、近代化とか国家化とは、情報の伝達分野でみれば、そのままマス・コミュニケーション化なのであろうか。パーソナル・コミュニケーションの方法の採用、それへの転換ができないのであろうか。

ところで、ヤップ島は地球最後の国連信託統治領からの完全な独立をめざして、いわゆる近代化を進め、文字どおり国家化に向けて現在、懸命な努力をはらっている地域である。このヤップ島の情報伝達の方法が、どうやら近代化路線を歩みながらも、そのまま短絡的にマス・コミュニケーション化せず、従来からの伝統的な情報伝達方式を、いわば上手に採りいれてパーソナル・コミュニケーション化しているのである。ここでは、例えば、ほぼ唯一のマス・コミュニケーション用メディアであるラジオ放送は、政治キャンペーンには使われても個人に関わるプライベートなニュースは少ない。そして、この状況を支えるのが乗合バスに代表される、車によるトランスポートの発達である。ヤップ島では近代化の結果、社会体制に変化が生じ、また従来のカヌーによる交通不便から急速に交通便利となって、人々の面接関係が強化され、しかも島地域全体を巻き込む、理想的なパーソナル・コミュニケーションが可能となったようにみられる。

本論は、近代化途上にある情報伝達方法の変化の、ありきたりな一過程に触れるに過ぎないのかもしれない。しかし、とりあえずここでは、近代化、国家化をめざすなかでの情報伝達方式は、必ずしも通信機器を多用するマス・コミュニケーション化ばかりなのではないこと、その他の手段を利用しつつ、伝統的な方法を近代化に生かして利用する方式があることを指摘し、若干の考察を加えてみたい。

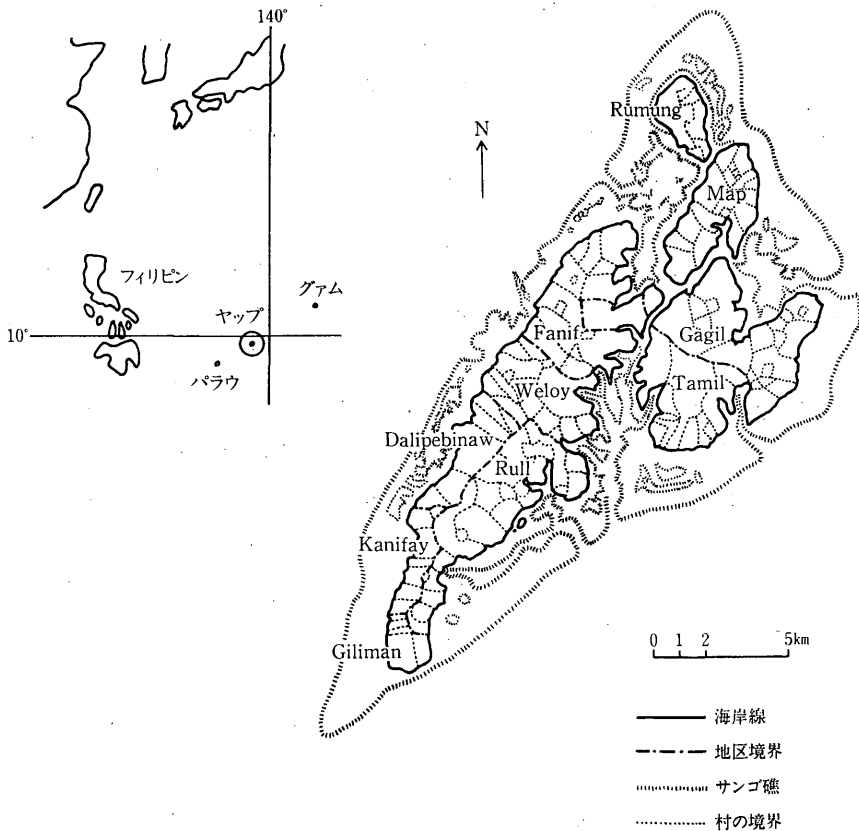
Ⅱ. ヤップ島概要

ヤップ島(ワァブ島)はミクロネシア、カロリン諸島西部の、北緯9度30分、東経138度5分、グアム島の南西 750 km ほどに位置する。変質結晶片岩を中心とする陸地面積100平方 km の陸島で、大きく4つの島からなり、周囲には珊瑚礁が発達している。気候は海洋性北モンスーン帯に属し、12月から4月までは比較的雨が少なく、7月から10月までは降雨が多い。年平均降雨量は 3075 mm, 多雨月は 350 mm, 少雨月は 250 mm ほどである。年間を通しての気温、湿度の変化はほとんど無く、年平均気温は27.2度 C, 年平均湿度は83%である。しかし12月以降は本当は低温度期である

にもかかわらず、降雨が少ないだけ体感温度は暑く感じられている（図1参照）。

1526年、ポルトガル人、ディエゴ・ダ・ロッシェが、恐らく西洋人として初めてヤップ島を発見する。以後、ナマコヤコプラなどを求めて、貿易商が時折出入りするようになる。島本来の呼称ワァアブが、もともとは權を意味するヤップという名前に変わったのはこの頃だろう。1886年のスペイン領有よりドイツ、日本統治を経て、1945年よりアメリカ合衆国による国連信託統治領となり、今日に至る。独立をめざしており、この過程でヤップ島は現在、行政的には自治政府であるミクロネシア連邦ヤップ州に属し、その首島である。

ヤップ島の人口はごく少なく、1980年当時で5227人であり、世帯数は1069、一世帯あたり4.9人、ほぼ5人である。住民の91%はヤップ島人で、ほぼ単一民族社会である。1979年時の州単位でみた就業人口は1809人、州人口9020人の20%にあたり、就業



[小林1978；LABBY 1976より作図]

図1 ヤップ島概念図

者は各世帯に1人の割合となる。就業者の71%が政府関係の公務員である。

外部からみるヤップ島社会の素直な第一印象は、アメリカ合衆国主導による施政が40年以上に及ぶにもかかわらず、驚くほどかたくなまでに伝統的生活習慣を保持していることである。外見からだけでもミクロネシア地域のなかで、ある特異な文化基盤を形成していることが感じられる。

ヤップ島の伝統的社会は複合的である。以下ではその伝統的な様相を見ることにする。ヤップ島は社会統合の面から屋敷、村、地区、島全体とに大別できる。

タビナウとよぶ屋敷は夫方居住婚規定に基づく父系的な拡大家族からなる。ヤップ全体を通して見られる年長制に基づいて、屋敷の長は最年長の男、通常は父になる。このタビナウには家の石積みの基壇、ダイフがあり、タビナウはこのダイフに冠された名前によれば、屋敷の長がこのダイフ上に住む。ダイフには祖先霊が宿るほか、村をこえて島全体にも及ぶ特定の位階、職能、特権、義務が付随して、これを相続し、一定の年齢に達した者がこれらの諸権利を保有、行使する。ダイフは同時に、田畑から山林、漁場までのあらゆる生活資源を提供する土地を付属している。土地は道から海岸線にいたるまで私有化されている。タビナウは経済的には自立した単位であり、その個々は、体系化されたヤップ島社会の枠組のなかで特定の職能を分担している、という意味で厳格に組織された政治単位ともなっている。

村、ピナウは複数の屋敷からなる2～4つの区から構成される。各区の最上位の屋敷の家長が区長となり、村の最上位の屋敷の家長が村長となる。村には最終決定を下す長老、村内外を指導する村長、村長達の指示を実行する責任者の、3者を代表に、議員、漁撈の指導者、呪術師、使者などの固有の職能がある。これらは特定の屋敷地、ダイフに付随する職能で、そのダイフの継承者によって執行される。村は共同施設として会議所、男子小屋、舞踏場、月小屋などをもつ。屋敷があらゆる生活資源を保有することに依じて、各村は散在し、自給自足的生活体制を築いている。村の集落部は主に海岸部に展開する。近隣との交通は小道もたどるが、遠方や主要な交通路は海で、かつてはカヌーがその中心的な交通手段であった。今日では、いくつかの広い道路が通じ、自動車の交通を助けている。

各村は8種類、6段階の位階の、いずれかに格付けされる。そして全村は、12の小地区が3つの大地区にまとめられている、網、ヌグと称される地理的な位置関係に従った連合に属する。村の位階はこの地区内の序列となる。地区を統括するのがブルチェとウルンと称される2種類の、第1位の格をもつ村である。同時に各村は、地理的位置関係とは別の、ヤップ島全体を通して2分される連盟、バーンにそれぞれ帰属す

る。連盟の分布は巧妙で、同じ連盟に属する村は地理的に連続していない。連盟同士で結束するので、常に近隣とは緊張、競合関係にある。第1位の2種類、第2位にもある2種類の位階は、それぞれこれら2つのバーンに対応するものである。ヌグとバーンを全島の統括するのが、ヤップ島最高位のダイフをもつ3村で、島の長老と呼ばれ、この下にブルチェとウルンがいて、ちょうど村の三極構造と一致する政治構造をもつ。

ヌグとバーンという組織に組み込まれる結果、各村は相互に、また常にある種の緊張関係にあり、その意味で非交流的であり、閉鎖的である。こうした地位を変えるための争いは多くあった。かつて各村の位階、連合の組み合わせなどはかなり流動的であった。しかし、この枠組全体のあり方は変わることがなく、社会改革よりも、「出る杭を叩く」形で均衡を保ってきた。かつては傑出した偉人は、その月並みでないという理由からだけで敵視され、戦争という形を通して暗殺された。この考え方は今日にまでその影響を及ぼし続けている。ヤップ島社会は、その高度に組織化された社会・政治構造を保つため、政治の三極構造を効果的に運用して均衡を維持しているのである。結果として、各屋敷、村は各自の職能だけを果たすことによって複合的社会的なかで整然と自律している。ここに見られるのは、制約付きの独立性と自己完結性、外世界に敢えて向かわないという意味での保守性、閉鎖性であろう。

大人数によって支えられるヤップ島の社会・政治体系であるが、かつて5万人ほどいたともされる人口は今日、極端に減少している。現在、人が住む村は107村ほどであるから、平均1村あたり49人、10世帯ほどで維持されていることになる。その結果、ダイフが少数の者に集中し、一人で複数の職能を兼任している場合が多く、ヤップ島社会にとって適正な状態からは大きくかけ離れているのが実状である。

ところで、こうした屋敷、村などでの情報の伝達は、その厳格な政治制度に呼応して形式的となる。命令、権威ある要請、伝達は伝統的に築かれた一定の道筋を通して実行される。この伝達方法はイモ蔓式に一方的で、情報の送り手と受け手の関係が固定的であり、情報の信頼性はきわめて高いが、それだけに機密性が強く、閉鎖的に伝達される [LABBY 1976; LINGENFELTER 1975; MÜLLER 1917; OFFICE OF PLANNING AND STATISTICS, OFFICE OF THE HIGH COMMISSIONER 1979, 1980; YAP INSTITUTE OF NATURAL SCIENCE 1981, 1983; YAP STATE GOVERNMENT 1981; 小林 1978; 牛島 1987; 矢内原 1935]。

ヤップ島でのコミュニケーションのあり方をめぐっては、この伝統的な情報伝達の方式からみてゆくことが効果的であろう。

Ⅲ. 伝統的な情報伝達方式

1. 情報、コミュニケーションの定義

本稿では、情報を知識、意見、感情などを意味するものとし、コミュニケーションとは、この情報が伝わり、情報の送り手と受け手とが情報の内容を認知し共有すること、とする。また情報伝達とは、情報の伝える部分を論じている以外は、すべてコミュニケーションと同義である。

パーソナル・コミュニケーションは、会話に代表される個人的で直接的、そして相互的な状況でのコミュニケーションをさす。マス・コミュニケーションは、一般的には新聞やラジオなどの機械的な媒体を用いて多数の人々に伝える、間接的で一方的なコミュニケーションをさす。コミュニケーション・ネットワークとは筆者の造語であるが、ここでは、ヤップ島での、特に今日のコミュニケーションが行なわれる関係全体を表現する。パーソナル・コミュニケーションを軸とし、個別的なつながりを網のように連結し集合させるこの方式には、ネットワークという表現が適当だと思われる。

2. ヤップ島での言葉の重要性と伝達方式について

ヤップ島ではもともと、情報やその伝達媒介として「口から発する声=*lam*」を最も信頼する。声、言葉は、ヤップ島人にとっての主体である土地からの意志を表現するものである。上位の職能に付く人をピルン (*pilung*) と呼ぶが、これは *pi*=多くの、*lam*=声からきているとされる。つまりピルンは、土地の意志の発言者であることで言葉に権威が付き、人はそれを聞き、従うのである。言葉のもつ重要さは相続時にも表われる。牛島によれば、自分の持っているダイフ、土地・財産、関係者等々に関する知識は、一種の財産と考えられており、年長者の独占するものとされている。男は死ぬ前に、後継者にこれらを口伝する。父が死ぬ前に、息子達に土地の分与に関して話をして、長男に位階・職能の中心となるダイフが与えられ、彼の父が使用していた土地の大部分を相続する [牛島 1987: 132-133]。

声、言葉が発せられて話 (*thin*) となる。ヤップ社会にとって最も大切な情報である話は、その内容によって冗談話 (*thin ni gasugosu*)、嘘話 (*thin ni malfith*)、真実の話 (*thin ni riyul*) と区分される。もちろん、真実の話が今後の話題となる。真実の話、自分達で責任をもって決めた話、約束を *mulwol* といい、これはまた伝達する、合意するなどの意味でもある [JENSEN 1977: 133]。

話は本人が直接、口頭で相手に伝えるのが一番である。face to face 関係は大切にされる。それが不可能な場合には、信用 (*pogan*) がある者が使者 (*malog*) にたつ。使者は送り手の分身である。近隣への用事を *gulugnem*, 遠方への使いを *malog* と呼ぶ。使者は情報の送り手が信用した者ならば、老若男女を問わないという。ヤップ島北部のあるピルンによれば、ヤップ人 = *gidi nu wa'ab* は全く未知の人 = *dali nen namanang*, 住いや顔は知っているが話しや相談をしたことはない人 = *dali e logomou*, 話相手 = *fole thin lomow* (2人でよくしゃべるの意), 友達, 親友 = *tafafil*, 親戚 = *tabinau, genong* に区分でき、話相手以上の親しい人なら使者として信用するという。

つまり、ヤップ島でのコミュニケーションのあり方は、パーソナル・コミュニケーションの原則そのものといえる。

3. 伝統的な情報伝達方式

(1) 村落間の公式伝達網 サァ, *tha'*

ヤップ島の村落間における村同士、屋敷同士の公式の情報は、送り手と受け手とが固定的な間柄で伝えられる。高位のピルン達は、関係する下位のいくつもの村をつなぐ連絡網を張り巡らしている。それは正に一連の伝達回路で、サァ (糸や繊維、つながりや関係を意味する) とかカナヲ, *kanawo'* (道とか方法) とよばれる。また第1位に属する村からの、最も強力な、依頼であれば決して断われない公式の伝達網をトガフ, *togaf* (物を吊る丈夫な紐の意) とよぶ。トガフは命令回線である。

サァには戦争などに関係する命令伝達と、ピルンの就任や葬儀、追善、集会所の落成などに催される儀礼祭宴などの行事についての連絡、調整用とがある。「村のピルン層の各屋敷は、それぞれ独自のサァ (回路) を他の村の屋敷との間に保持しており、儀礼に際しての貴重品の調達、労働奉仕の要請、賠償の支払い、援軍の依頼、催しへの招待、さらには殺人の依頼などに使われる。今日では選挙に際しての票の取りまとめにも利用されている」[牛島 1987: 246-247]。

サァは村長の屋敷を結ぶのが最も強力であるが、全てのサァが村長に委ねられているのではなく、他の屋敷はまた別なサァを持ち、ここでも一定の均衡を保つ抑制が機能している。

サァは情報伝達の特殊な形態ではなく、対外的な関係一般を指す仕組みである。しかし、ヤップ島のこの方法は、誰が誰に、何を伝え、相談するのかが、きわめてはっきりしている点で特徴的といえる。網という表現も個々の関係の集合という意味からきている。そして使者をたてるにせよ、情報は口頭で直接、相手に伝えねばならない。

(2) 村落内の公式伝達網

村落内の公式な情報もサア同様、送り手と受け手とが固定的な間柄で伝えられ、その関係は網状である。基本的には村長から区長、そして村の住民へと位階の順に伝達される。村は長老、村長、実行責任者の3者が代表とされるが、例えば、マープ島ベチエル村では、村長の下に若者頭、娘頭、そして4人の区長と続き、公式の情報はこの順で伝えられる。しかし、内容が男性に限る場合は、村の女性全員を総括する娘頭には伝えないという。

伝達は直接の対話となる。話題によっては人目を避けて話されるし、村中への相談やら伝達には会議所が使われる。話題によっては会議所に女性も集い、積極的に発言もする。区内だけの相談や、壮年、若者の話し合いなどは、おもに区単位にある男子集会所でなされる。女性だけの集まりには、かつては月小屋、産所が用いられたが、女性だけの集会場を持つこともある。相談がされるとはいえ年長制に基づき、多くは年長者が話をリードし、若者はそれに従う。

村落間であれ村落内であれ、上位の者や年長者は判断が正しく、また下の者のことを十分考えているとされている（普通、父親と息子の関係に例えられる）ので、この上意下達式が一般的なコミュニケーションの方法であったし、今日でも、こうした傾向は強い。

(3) 親族間の私的連絡網

伝統的生活での個人的、私的情報の伝達については、あまりはっきりしていない。ただ、私的連絡の単位は今日でも親族集団をその核としているので、かつてはさらにその傾向が強かったに違いない。またその地理的範囲は狭く、父方母方共、隣かあるいはせいぜい島を12に別けた小地区内で収まっていたという。伝達の方法も今日の事情からみて、本家から分家へ、影響力の強い親族筋からそうでない者へというように、情報を伝える間柄がはっきりしていたことだろう。

情報の内容は、こまごました日常の問題から結婚や披露、そして親族で一番の関心事となる葬儀、追善供養に及ぶ。上位のピルンが催す儀礼では、石貨や貝貨などの貴重品や食物が交換、分配され、舞踊も演じられる。他村のピルン達も正式参加するとあって準備は大変である。大きなものとなると2年ほど準備にかかり、親族を広範囲に巻き込む。もちろん、これらの相談、打ち合わせ、伝達は送り手の口頭による。

4. ま と め

ヤップ島では伝統的に村落間、村落内に公式、私的な情報伝達のつながり、網があ

り、あらゆる情報がこの網を通してやりとりされている。このコミュニケーションの網は、分身としての使者をたてることはあれ、基本的には送り手が情報を口頭で直接、受け手に伝える、というパーソナル・コミュニケーションの方法を堅持している。情報伝達先が多くなっても、イモ蔓式ではあれ、その個々と個別に、固定的につながり、それが結果として連続しているという形の関係を築いている。

ヤップ社会は、常に内外に対して緊張関係にあり、そこから保守的、閉鎖的性格をにじませている。一方、パーソナル・コミュニケーションも個人的で直接的であるだけに、情報の信頼性は高まるが、他に対しては閉鎖的、秘密的となる。この両者は結合しやすい。ヤップ島ではその複合的で階層的な社会構造に合致したコミュニケーションの方式として、パーソナル・コミュニケーションの方式を援用したといえるかもしれない。

IV. 近代化、国家化に伴う変化

1. 近代化、国家化の意味

もともと近代化とか国家化という語の含む意味は、さほど厳密ではない。したがってここでも、近代化とは、ごく一般的に伝統的社会から近代社会への移行に伴う諸変化とする。ヤップ島における近代化の具体的な現象は、ヤップ島独自の民俗文化から、ドイツ、日本、アメリカ合衆国などの影響による、西欧近代文化への変化にみることができる。

国家化とは、国家をごく一般的に国民、領土、統治組織を基本的条件としてそなえ、その統治組織が国の内外の他の干渉を許さない状態にあるものとしてとらえ、そうした国家に向けての移行過程とする。今日のヤップ島における国家化の具体的な現象は、ヤップ島独自の政治組織から、主にアメリカ合衆国などの影響による近代的立憲民主主義国家への変化にみることができる。

ここでいう近代化、国家化が、伝統的文化や政治組織の全面否定から、理想的文化、政治組織への完全移行を意味するものではないのは、勿論のことである。

2. ヤップ島における近代化、国家化に伴う変化概要

(1) 価値観の変化

ヤップ島の近代化、国家化の歩みは1886年のスペイン領有に始まる。これは1899年に終り、以後、1914年までドイツ領となる。1914年から1945年まで日本領となり、以

後、アメリカ合衆国の施政下におかれる国連信託統治領となり、今日に至っている。

この間、スペイン時代にはキリスト教が導入され、ドイツ時代には戦争禁止による平和化が進み、位階が固定された。また近代経済概念が根づきはじめた。日本時代は軍国主義に基づく植民地行政が実施されたとはいえ、文明開化の時代といえるかもしれない。公学校による義務教育が実施され、日本文化と国家像が導入されて、近代化への歩みを始めた。1945年以後は階級社会制度が廃止された、民主化、自由化の時代であり、個人としての自覚を持ちだした時代である。

伝統的社会からみると、ここには大きく戦争状態から平和へ、外世界の自覚、階級社会から平等社会へ、集団体制から個人主義的体制へ、宗教や価値観を含めて伝統的慣習の拘束からの自由などの変化をあげることができる。しかし、当然ながら変化の様態は多様で、戦争のように完全に無くなったものから、いまだに伝統的な慣習や体制が強い影響力を及ぼしているものもある。また、よいものが失われたことも多い。宗教観念をはじめとする伝統的観念、伝統的行動基準、倫理などにそれらは目立つ。

なお、個別的で重要な変化は以下である。

(2) 政治組織の変化

位階に基づく封建的政治組織から立憲民主主義議会制政治組織へ変化した。1979年にはマイクロネシア連邦を結成し、民選によるヤップ州知事が誕生した。ヤップ唯一の町コロニアは州都となった。そして現在は自治政府を発足させており、国家としての独立に向けて努力中である。ヤップ史上、初めて島全体を単独の組織が統括する事態となった。

しかし、その統制力は弱く、軍事力はいうに及ばず警察力ですら、その効力は州都コロニアの域を出ない有様である。そしてピルン評議会が上院に設けられているように、伝統的政治組織は今だ強い影響力を及ぼしている。

(3) 社会の変化

戦争が無くなり、島は完全な平和状態となった。また階級社会から民主主義社会へ変化して、各個人、屋敷、村は緊張感、閉鎖性、保守性から解放された。人はそれまでの特定の政治組織の一員であった公的な状態から、少なくとも親族を核とする個人的、私的な状態に変わった。

その結果からか、80年代初頭頃から若者の暴走的行動、犯罪が激増し、家庭、村落、国家における無力を計らずも露呈した。しかし、青少年のこうした暴走に対してピルン達が伝統的な処罰の方法を復活させ、それが効を奏して84年頃から島が再び静けさを取り戻すに及んで、かつての堅固な倫理、社会意識が再認識されているかのようで

ある。また集会所など公共施設が作られなくなり、その結果、島中の関心を集める落成式など、大規模の儀礼祭宴の機会が減少し、伝統的催し事がなくなってきた。しかし、この点についても80年代にはいって様子が少し変りだしてきている。伝統文化見直しの気運が一部に生じたようで、男子小屋や集会所が修復されたり、大規模な儀礼が催されるようにもなった。70年代では見ることもできなかったカヌーが最近、再び話題になりだしてもいる。

(4) くらしの変化

人の往来が自由になって、親族や友人が島中に分散するようになった。島から出て外国に住む人も多くなった。物品から情報にいたるまで、その入手先は地球的規模にふくらんだ。行政、厚生、情報入手、物品購入の適地として、州都コロニアの重要性が高まった。そして人々はこれらの用事でコロニアに出る機会が増した。生活圏が拡大し、島民は皆同じだという国民意識が生じてきている。

しかし一方、コロニアなどで全く氏素姓も分からぬ男女が知り合い、いざ結婚という段で、かつての位階がはっきりし、親、親戚が大騒ぎを始める、というような混乱も生じている。

(5) 交通の変化

近隣の陸地では徒歩、他はカヌーに依っていたものが、オートバイ、船外機付きボート、そして自動車へと交通手段が変化した。この結果、行動圏が拡大し、行動の密度が高まった。82～83年頃からの自動車の急激な導入と、コロニアでの犯罪が急増したことなどから、コロニアの勤労者はそれまでの下宿を引き払い、村の自宅、つまり両親の家に戻って、そこから通勤するようになった。そのため週末や5時以降の州都コロニアは、人影一つ見えないほどになっている。

以上の変化がヤップ島社会で最近までに生じた主なものであるが、これらの多くは正に近代化、国家化の過程で生じる典型的な事柄と重なり合うものであろう。

(6) マス・コミュニケーションの登場

近代化、国家化への変化に伴って、コミュニケーションのあり方、情報の伝達方式も、当然ながら影響を受けざるをえなかった。近代化の通信における旗手としてラジオ放送が導入されたのは1965年であった。ラジオ放送局は現在、州政府の運営の下にあり、州の施政方針に基づいて放送が行なわれている。

1979年のテスト放送に続いて、翌年1月からはテレビ放送が開始され、1983年には隔週刊の英語の政府広報新聞も発行され始めた。

V. コミュニケーション・ネットワークの役割

ヤップ島社会の近年の変化に即して、情報伝達のあり方にもマス・コミュニケーションの方式が加わり、従来の伝統的方法が今日的に変化するなど多様化してきている。ここでは、こうした様子をさらに詳しくみてゆきたい。

1. マス・コミュニケーションの役割

(1) ラジオ放送

近代化、国家化のなかで、コミュニケーションの分野ではそのマス化が促されるのは自明とされている。実際、ヤップ島では1965年にラジオ放送が開始されて以後、唯一のマス・コミュニケーションの媒体として、住民のラジオ熱は目をみはるほどであった。70年初頭ですらラジオを持つことが一種のステイタス・シンボルであった。大人たちがバスケットの中に小型携帯ラジオを入れて持ち歩き、寄ると触るとラジオに聞き酔いしれていた。明らかにラジオ放送は、近代化にむけての頼もしい情報伝達メディアと見られた。ところが最近、その様子が変わってきたのである。

ラジオ放送は、一般に無線技術を応用して、同時に広く公衆に報道、教養、音楽、演芸、スポーツなどの番組を放送するものとされている。藤竹は、〈ニュースと音楽〉はラジオ放送における古典的パターンであるとともに、また今日においてもこの二つの種目が、ラジオ放送の主流を占めている、とする〔藤竹 1976: 280〕。

しかし、これはヤップ島のケースには、形態においては似ているが内容的には必ずしも合致しない。石森によれば、当初は音楽番組が中心であり、そのほかにアメリカ高等弁務官政庁（信託統治行政の本部）からおくられてくる通達事項がニュースとして放送された〔石森 1984: 28〕。そしてこうした「上意下達」式の放送から、連邦結成後は州政府の運営によって、音楽番組が8割近くをしめているが、たとえば憲法制定や将来の政治的地位の問題などの、国家形成にともなう重要な問題などを扱う「政治的キャンペーン」を目的とした放送に重点がおきかえられつつある〔石森 1984: 28〕。

1983年の時点では、放送は通常、朝の6時から開始され夜の12時頃に終了するが、ヤップ WSZA 放送局の正式番組表によれば、この間、音楽以外の時間は3時間にすぎない。しかも実際はこれは守られず、音楽が続く。その内容は大部分がロックなどアメリカの騒がしい音楽ばかりで、ヤップなどの民族音楽はごく一部に過ぎない。一方、音楽以外の部分は、45分間、連絡の時間があり、あとはVOAの英語版世界ニュ

ースと、わずかなヤップ語翻訳を流すに過ぎない。連絡の時間は英語、ヤップ語、ウリシー語の3か国語なので、実質時間はわずかである。しかもこうした報道部分のうち、ヤップでは個人にまつわるニュースが欠落しているのが大きな特徴となっている。放送局ですら時期をはっきり把んでいないのであるが、おそらく連邦成立後、それまでは放送していた個人に関する誕生とか、結婚、死亡のようなプライベートなニュースを、また最近では強盗、暴行、殺人などといった犯罪関係のニュースさえも、報道に対して不満をもつ人が出はじめたため、放送しなくなった。残るのは石森の指摘する近代的行政に関する「政治的キャンペーン」や、行政サービスの通知しかないことになる。

(2) その他

ラジオ放送の他、1980年からはテレビ放送が始まった。おそらく現在ではテレビ受信機の数も伸びているだろうが、83年時では450台に過ぎなかった。内容はアメリカの娯楽、スポーツ番組が中心で、午後2時半から10時半までである。週2回、自作番組を放送しているが、官営放送なのでラジオ放送と同様、州政府の政治的キャンペーンの一翼を担っているといえよう [石森 1984: 30]。

1983年から発行され始めた新聞も、行政の広報紙である。隔週刊のこの新聞はコロニアのスーパーなど、人通りの多いところに置かれ、無料で配布されている。しかし、部数に制限があるうえ英字紙なので、むしろ若者向きメディアで、社会のリーダー達にまでは届きにくい。

以上、ヤップ島に最近導入されたマス・コミュニケーションをとりあげたが、ヤップ島ではラジオ放送がマス・コミュニケーションの中心を占めるメディアであること、その内容は多分に娯楽性と行政にかかわる面が強いことがはっきりした。こうしたマス・コミュニケーションの伝える内容は住民の日常生活と無縁とはいえないが、しかし、ごくふだんの生活に緊急に必要というものではないだろう。

2. ラジオ離れ

そして最近(80年代前半)、多くの大人たちが、明らかにうるさいだけのアメリカ音楽とあまり分からない英語での世界ニュース、自分の日常生活には縁の無い話ばかりに飽きてか、ラジオ放送に耳を傾けなくなった。若者はといえば、もっと直接的に音楽の世界に浸れるカセットテープ・レコーダーへと移行し、ラジオなどまるで聞いていない。1980年当時で65%の世帯がラジオを所有しているが [YAP STATE GOVERNMENT 1981: 74]、この数は恐らく増加していないであろう。ほんの10年前

の、あのいわばラジオにしがみついていた頃とは、まるで様子が違うのである。

この現象は同じミクロネシア地域内の、例えばパラオ島、トラック島やポナベ島などとも違う。これらの地域では、多くの家でマス・メディアからの情報が、一日中、ボリューム一杯で流されている。

この最近のラジオ離れは、私達の生活のように過剰情報からくるラジオ離れでは決してないだけに、理解しにくい。しかし放送内容とラジオ離れの現象そのものから、ヤップ島のマス・コミュニケーションは、住民の生活に直接、関係する情報を十分には伝達していないことは明らかである。するとこの役割を果たす他の手段の存在が予測されることになる。

3. 伝統的伝達方式の私的化

(1) 私的化したサァ

従来からある村落間、村落内の公的、私的な情報伝達のつながりである網（サァ）は、近代化、国家化のなかで変質せざるをえなかった。

位階に基づく強固な階級政治体制が廃止された結果、かつての最高位のピルンから連盟（バーン）を通しての命令、伝達網は公式には消滅した。代わりは、かつての小地区にあたる10の区域から民選された、地区長による定期的会議（ピルン評議会とよばれる）での討議となった。また大地区という区分の役割も薄れ、地域の問題も島規模の問題と変わり、高位のピルンからの公式の伝達もとだえた。

しかし、このかつての公式伝達網サァの関係自体が無くなったわけではない。非公式化、私的化したにすぎない。住民によれば伝統的なサァは、特に選挙時に顕在化するという。サァはかつての高位のピルン自身にしろ、その息のかかった候補者の応援にしろ、票のとりまとめに使われる。情報は行き届くからコミュニケーションの網としては機能している。しかし、伝達を受け取る側は、依頼があっても、かつてのような命令ではないのでそのまま聞く必要はないし、その通り実行されたか調べようがない、という。事実その通りで、最近ではかつて最高位であった三人のうちの一人が、投票依頼にサァを使ったが落選した。筆者は直接、その本人から伺ったが、依頼に拘束力がないのは承知しておられた。一方、かつての高位の人が催す行事などの連絡、調整としてのサァも機能している。最近では集会所落成式、故人の追善儀式など、いくつかにこのサァが使われて、効果を発揮した。しかし、これも私的な連絡である。

つまり、かつての伝統的な公式情報伝達方式は私的なものへと変化し、連絡や個人

的關係の強化などに使われるようになっていゝ。村落内の公式伝達網も、會議など關係者の参加を得て行なわれるようになった。しかもこのサアの道は、かつてのように公式に關係が引き継がれないために衰退しつつある。昔を知る老人達には通じても、若い人の中にはサアの存在すら知らない人も多くなっている。

ヤップ島のかつての公的コミュニケーションの特徴はパーソナル・コミュニケーションなので、公開的な近代化、国家化にあつては、その個人的な性質の分だけ否定化され、また私的化せざるをえなかつた。しかし反面、これが個人的な人格的關係なだけ政治体制の変形後も機能し続けているといえる。形式は継承しながらも、巧みにその本質を変えたといえよう。

(2) 拡大、発展した親族間の私的連絡網

一方、親族間の私的連絡網は、パーソナル・コミュニケーションの方式をとつてそのまま飛躍的に拡大、発展した。近代化、国家化とは、とりもなおさず個人化を意味し、個人のコミュニケーション・ネットワークの活動が軸となるからである。ヤップでは未だ私的で個人的な単位は親族を中心とするものであるが、平和化、平等化のなかでこのつながりが空間的に拡大し、親密さの密度が増した。

4. 情報伝達方式としてのコミュニケーション・ネットワーク

以上、近代化、国家化の変化のなかでマス・コミュニケーションの登場とその内容、私的化したかつての伝統的情報伝達手段、発展した親族間の私的連絡網のあり方などを見てきた。そしてラジオ放送に代表されるマス・コミュニケーションが、ヤップ島では生活に必要な情報の伝達という役割を十分には引き受けてはいないことが明らかとなった。マス・コミュニケーションは、娯楽と政治キャンペーン、行政サービスに関する窓口にしか過ぎないのである。

したがつて、生活に必要な他の情報の伝達は、新たに形を変えたかつての伝統的情報伝達方式がその役割を担っている、ということになる。いわゆるラジオ離れは、そうした事実の裏付けでもあろう。私的化したかつてのサアや親族間の私的連絡網のいずれも、情報の送り手が直接、受け手へ口頭で伝達し、その關係が個別なつながりを保つ、という形態を維持している。他に類例はあるかもしれないが、とりあえずここではヤップ島のこの新しい形態の情報伝達方式を、コミュニケーション・ネットワークという名前でよびたい。

Ⅵ. コミュニケーション・ネットワークの成立基盤

ここでコミュニケーション・ネットワークが、今日のくらしのなかでどのような形で成立しているのかを検討してみたい。

1. 理想的な情報伝達方式の実現

ヤップ島民が民族的に理想とする情報の伝達方式は、情報を伝える本人が受け手本人に、直接、口頭で情報を伝えるという、パーソナル・コミュニケーションの原則そのものである。それは彼らが、もともと「口から発する声」に深い信頼を寄せており、話だけであらゆる事柄、彼らにとって一番重要な位階や財産の相続までもが処理されることを考えれば、容易に納得がいく。伝統的に文字を持たなかったことも、この傾向に拍車をかけたに違いない。また広い意味で、屋敷から村までが自給自足的生活体制を築いており、各個人がそれだけ独立的であり、また相続者が社会的に規定されておらず、選択はその譲渡者の意志に任されていることからでも明らかのように、個人のそれぞれの人格が尊重されていることなども、こうした事情を支持する大きな背景となっていよう。

近代化の旗手として登場したラジオ放送を初めとするマス・コミュニケーションは、情報の間接的で一方的な発信、機械的媒体の利用、情報の受け手の複数化、こうした方式がもたらす情報の開放性、公開性というような性格などからして、パーソナル・コミュニケーションとはその性格を全く異にする。ヤップ島での低い利用率は、こうした基本的性格からしても明らかとなる。しかもラジオ放送の基本であるニュースと音楽についていえば、ニュースは個人に関するものがなく、音楽は若者向けの英語の騒がしいものばかりである。これでは日常生活のなかでマス・コミュニケーションに依存する比率は低下しても当然であろう。

一方、私的化した伝統的な情報伝達方式のコミュニケーション・ネットワークは、彼らの理想的な情報伝達方式に適うものである。ヤップ島民が民族的に理想とする情報の伝達の方式は、近代化の結果、可能になったといえるかもしれない。

2. 情報の重要性

他地域の人々と同様、ヤップ島人にとっても情報は大切である。情報についての量の多少、信頼性、新鮮さなどは、彼らの日常、非日常生活に多大な影響を及ぼす。

例えば人が家を建築する場合、大工は親族か、同じ村人か、知人のなかから、この

順序で選ぶ。材料集めや屋根ふき時などは親族、同じ村人や友人、知人、それに仕事を聞きつけた人などに、この順で助けてもらう。長期的で安定した現金収入源は、就業者の70%以上が占める政府関係の公務員である。ここへの就職は、やはり関係者筋のコネクションが有効だと推察される。ちなみにヤップ島の北部で1978年より実施された、地方部ではかなりの規模といえる650万円相当の公共事業の場合、雇用された者は1978年が22人、79年が13人、80年が26人、83年が24人ほどであるが、このうち担当監督者の親族が占める割合はそれぞれ60%、85%、53%、79%であり、しかも非親族の多くは友人であった。

こうした日常生活でも情報が重要であることは分かる。そしてこのことはまた、情報源が広く、しかも内容が濃く、さらには情報伝達者が親族や知人・友人であるなど、情報源や情報網が緊密で私的、あえていえば閉鎖的、秘密的であると都合がいいことを意味する。

ヤップ島の人々にとって非日常的出来事のなかで最も重要なものは、葬儀である。情報のやりとりも交通手段も便利となった今日、葬儀に出席しない親戚とは、以後、親族関係がとぎれる、という。葬儀は死後2～3日後の土曜日か日曜日に行なうが、今日ではその連絡通知も、出席への交通も可能ということが前提化しており、出席の有無もほかの要素が排除され、純粋に本人の意志だけによる、する、しないの表現で言い表わされる。「仕事は明日できるが、葬儀は今日だけ」というのである。となると、葬儀の日時の連絡を中心とする情報は、彼らにとって大変重要であるといえる。

マス・コミュニケーションによる行政サービスの公共の情報を除けば、彼らが入手する情報源は広く濃く非公開的であるほど、個人の生活に都合がいいことが増すに違いない。また今日、以前にも増して情報の重要性が高まっているはずである。

3. 情報入手の方法

では、生活に都合のよい、くらしに大切な情報は、コミュニケーション・ネットワークで効率的に手に入っているのだろうか。

(1) 全島に及ぶ情報源

今日、島民のほとんどは、信頼できる情報源の数や広がりをかなり持っている。図2～5は、ヤップ島北部に住む人、つまり一般に情報の中心地から遠くにいると思われる人を主として、1983年当時で、本人が信頼し親戚つきあいをしている親族と友人の人数と分布を、行政的な村単位毎に図化したものである。社会的地位の異なる4人のそれぞれの情報網を示しているが、いずれも本人の居住地から遠ざかるにつれ情報

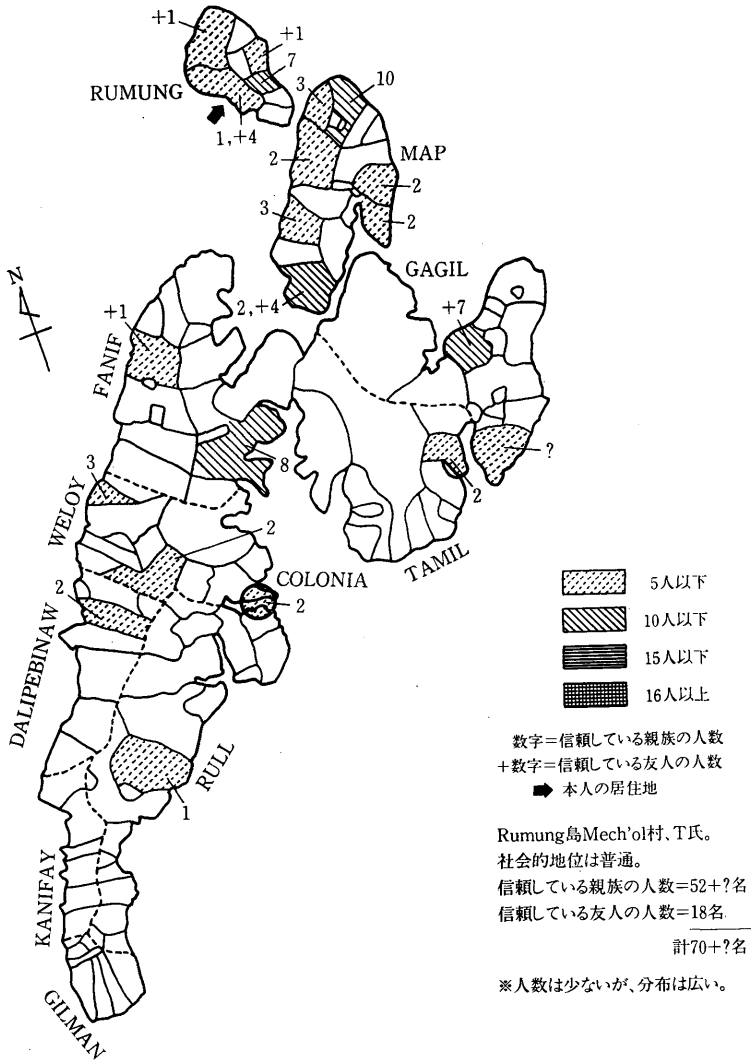


図2 信頼できる情報源の分布 事例1

源となる人数は稀薄化するにもかかわらず、情報源となる分布はほぼ島全域に及んでいること、社会的地位が高まるにつれ、こうした関係者の数と分布が高密度化していくことが、はっきり読み取れる。

(2) バス交通とコロニアの位置

次に情報の伝達、入手の方法であるが、これは近年、目覚ましい早さで変化を遂げている。その要としてモータリゼーションによる交通の至便化、その結果による当事者のより直接的な触れ合いの強化、交流基地としての州都コロニアの地政的位置とそ

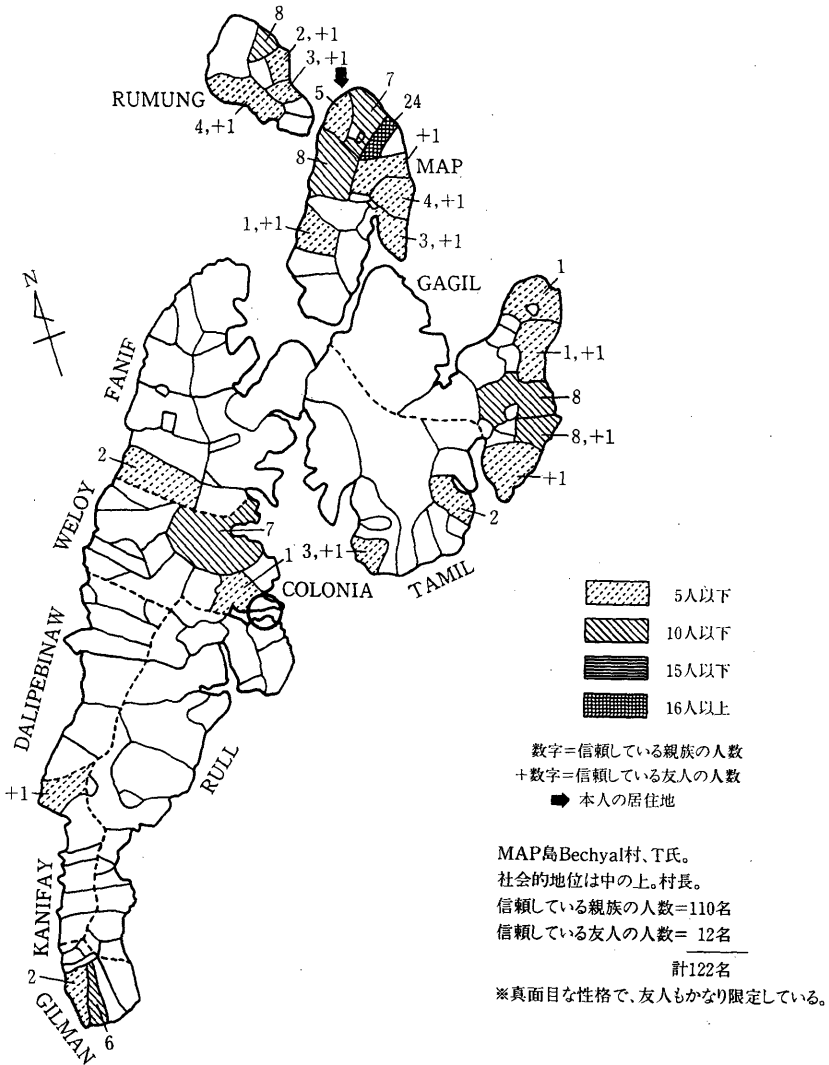


図3 信頼できる情報源の分布 事例2

の役割などを指摘できる。

イ. カヌーから乗合バスへ

ヤップ島では、従来、長い間、交通手段は徒歩かカヌーであった。近隣へは細い踏み分け道も利用するが、村の集落が海岸線に沿って点在するため、もともと遠方や主要な交通路は海で、カヌーを手段として利用するシステムだった。船交通は一時に多量の荷物が運べるとはいえ、その運行は天候、潮の干満によって大きく制約される。

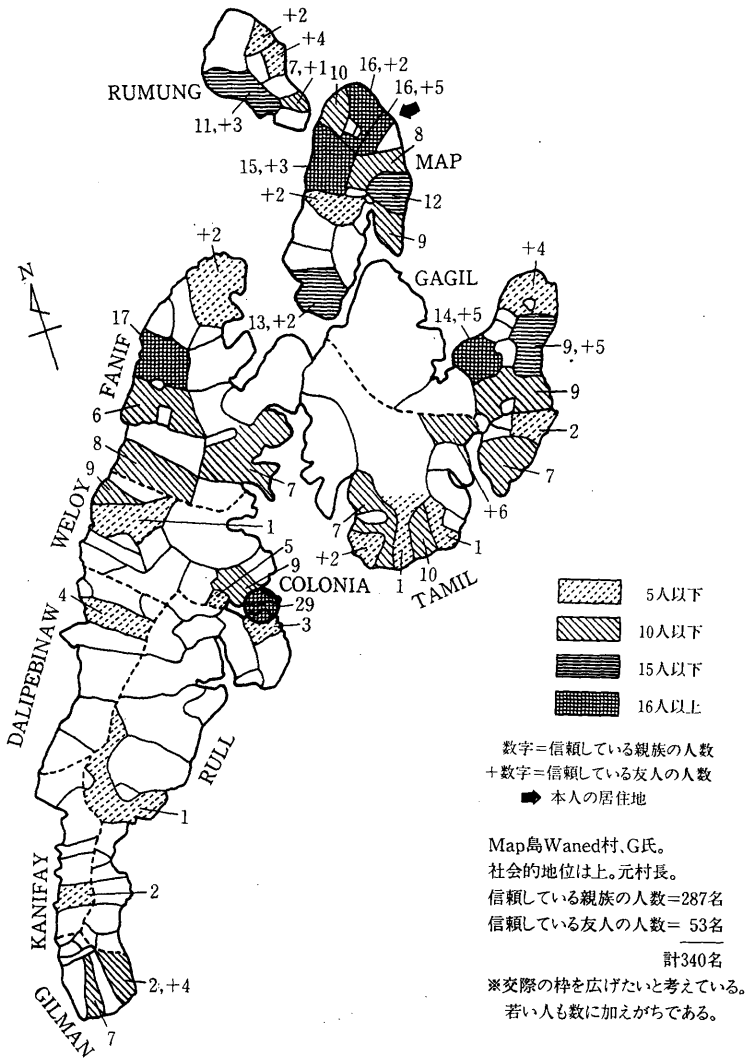


図4 信頼できる情報源の分布 事例3

また船の操作には技術が必要であり、誰でもが乗れるものではないなど、不安定、不便なものである。朝、村をでかけ、昼間のよい時間帯に5～6時間コロニアにいて、夕方までに村に帰る、という都合のよい状況は、1か月間に1週間あるかないかである。近ごろではカヌーが船外機つきボートに代わったが、スピードが早まるだけで、自然の状態は変わらない。

一方、道路事情は日本時代に大幅に変わった。細く曲がりくねっていた道は直線化し、多くの家々が取り壊されたが、村を巡る道にトラックが通れるよう、道幅拡張工

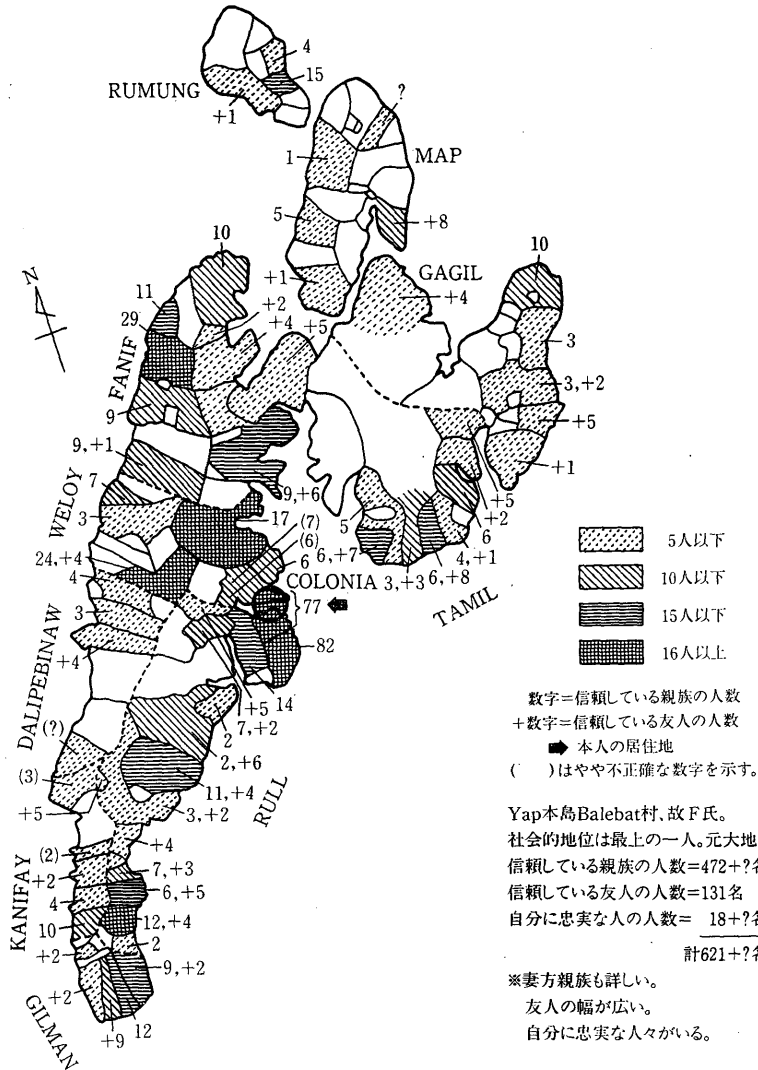


図5 信頼できる情報源の分布 事例4

事が実施された。アメリカ時代には、それまでさして利用していなかった山の尾根筋の道路が整備され、一層、車での交通が便利となった。

1970年代前半では、住民が利用する自動車は、ごくわずかであった。村中が、たった一台の小型トラックの荷台に鈴なりになって乗り込んでいるような状態であった。そのような中、1972年に日本人経営によるパシフィック・バス・カンパニーが設立され、主に学生をコロニアに運び始めた。ヤップ島での乗合バス交通の始まりである。

この会社は1975年から1976年、政府教育省に移管され、81年当時、バス4台、運転手5人ほどで運営されていた。81年11月、民間のパブリック・トランスポーターション・システムが政府の委託を受けてこれを引き継ぎ、今日に至っている [印東 1984]。1982年当時、当バス会社は5台のスクール・バスと5台の改造トラックのほか、フェリー・ボートを1せき運行させており、ふだんは学生や公務員を中心に1日1400人ほどの、また給料日の金曜日には2000人ちかくの利用者があった [SKINNER 1982]。

80年当時の人口が5200人あまりなので、給料日となる隔週の金曜日には、人口の半分ほどがコロニアに集まることになる。乗合バスは驚異的なスケールで人々の交通の便を計ってきているのである。

80年当時で船外機つきボートは5世帯に1せき、また同じくトラックを含めた自動車も5世帯に1台、所有している [YAP STATE GOVERNMENT 1981: 76]。しかしこの頃の印象は、自動車よりもオートバイの普及が目立っていた。ところが1984年には数多くの自家用自動車が目につき始めた。そしてこのバス会社には既にフェリーはなく、3台の大型バス、1台の小型バス、6台の改造トラックが、1日平均503人の利用者を運ぶに過ぎなくなってきた。この年にはオートバイもすっかり減少したので、自家用車への切り換えが確実に、しかも急速に行なわれたことになる。乗合バス交通は1日1～2便しかなく、しかも時間が定まっていることなどが問題となってきたのであろう。

こうしてヤップ島では、今日、交通手段がカヌーから自動車にすっかり変わってしまった。ここでは、乗合バス交通を自動車による交通手段の象徴的な指標として捉えていくが、この乗合バス交通に代表される交通手段の変化は、情報の伝達に関してみると、情報の個人的で、かつ迅速なやりとりを保証するものである。

同時にこの変化は、乗客の、つまり情報の送り手、受け手の直接的な触れ合いをより強化させた。あまり動くことができなかつた人、足の悪い人から目の悪い人、老若男女の誰でもが、ほぼ自由に、何時でも、どこへでも移動できるようになったのである。それは従来の様態を一転させるほどの変化であったといえよう。パーソナル・コミュニケーションの理想的状態への基礎が十分築かれたといってもよいだろう。

付言すれば、ヤップ島のモータリゼーションに対しては、近代化・国家化に伴う住民の意識の高揚、生活の変化、世界的なモータリゼーションの影響、港湾や空港整備などの大型公共事業による現金収入の増加、中古車販売の促進などを要因としてあげることができる。

ロ. 情報センターとしてのコロニア

乗合バスの路線は、州都コロニアを起点にして全てが放射線状に広がる。あらゆるバスは島の端の地域からコロニアに向かって進み、また同経路を戻るのである。ところでコロニアは西欧人が開いた全く新しい町であり、ちょうどヤップ首島のほぼ中央の、静かな湾に位置している。コロニアから首島の南端まで約 15 km、北端まで約 10 km、東端まで約 12 km、最北部まで約 20 km ほどである。島が小さいこともあって、さほどの距離ではない上、全ての人々がほぼ同じ条件で、ごく簡単にコロニアに出て来れるのである。

そしてコロニアはその性格上、行政、厚生、商業の中心地となっている。政庁、警察署、裁判所、消防署、郵便局、教会、学校、病院、銀行、スーパー・マーケット、ホテル、航空会社、輸送会社、倉庫など、小規模ながら一応揃っている。ここで人々は自給できる品物以外の、生活に必要なほぼ全てを賄い、ほぼあらゆる事務手続きを済ませるのである。

この州都コロニアで人々は目的の人と直接、出会い、情報を交わしあう。あるいは使者として信頼できる人を探し、伝言を依頼する。コロニアでの具体的な情報交換の場は、かつてはスーパー・マーケットの店前のベンチや船着き場であったが、今日では、それらにバスの発着所、喫茶店、病院のロビーなどが加わっている。コロニアは情報のセンターでもあるのである。コロニアはまさに地政的に最良の場所に位置し、計画通りに機能しているといえよう。

(3) 情報伝達の実例

こうして現在、人々は、バスや自家用車を利用してコロニアに集まり、活発に情報を交換しあっている。また主に交通手段の至便さから人々は村で住い、かつてのようにコロニアにいる必要は完全になくなっている。このことは、現状の情報のやりとりの方式が一応の成果を上げていることを意味しよう。

情報の伝達方式の実例を、住民の最も関心の高い葬儀の連絡にとってみる。ヤップ北部のオネッドゥ村での、ある高齢の女性の葬儀の場合、世帯主が地区の有力者であったからか連絡がほぼ全島に及んだが、これは 2 人の使者がコロニアにでかけ、その日一日でまず 13 人と連絡をとり、彼らを使者としてコミュニケーション・ネットワークを通して全ての関係者に連絡をつけた。葬儀には 200 人ほどが参列した。北部ベチエル村の有力者の母親の死去の際、青年である甥と息子の 2 人がコロニアで親族を探し、その日中に全島に散らばる 100 人余りの親族と連絡をつけた。ヤップ最北端ルモン島の大工が死去した際は、まず 27 人に連絡をつけた。このうち 4 人にはコロニアの病院で会い、残りは 3 人の使者がたって連絡を分担した。27 人は、それぞれまた関係

者に連絡をとった。葬儀には海を越えて150～200名あまりが参列した。

狭い島とはいえ、2～3日というごく短期間で100人以上の人々と連絡をつける、このコミュニケーション・ネットワークの仕組みは、なかなか効率のよい情報の伝達方式であるといえよう。

4. ま と め

最近のヤップ島では、情報は、筆者がコミュニケーション・ネットワークとよぶ、当事者同士が直接、口頭で行なう私的な伝達方式でやりとりされる。この方式を生んだ基盤としては、まずヤップ島人達が伝統的なパーソナル・コミュニケーションを大切にしてきたという、民族的土壌があげられる。次に、生活のなかでの情報が近年一層、重要になってきており、広範囲からの信頼のおける個人的情報の迅速な入手とか交換などが必要となってきたことである。

ヤップ島の場合、ラジオ放送などから得られる行政的サービスなどに関する情報を除けば、情報源は全島に拡散する信頼できる親族や友人たちである。そしてこの情報を個人的に、迅速に伝達したり入手する手段として、近代化、国家化の波のなかで生じてきたモータリゼーションを利用している。具体的には乗合バス交通を主に利用して州都コロニアにでかけ、直接、当事者同士が会い、口頭での伝達をするのである。

VII. お わ り に

以上、「ヤップ島のコミュニケーション・ネットワーク——バス交通が結ぶ face to face 関係」と題して、今日（1980年代前半）のマイクロネシア、ヤップ島における人々の情報の伝達、コミュニケーションの様態について概観してきた。

そしてヤップ島では、近代化、国家化の過程で、情報の伝達をラジオ放送に代表されるマス・コミュニケーションの方式に変えるのではなく、モータリゼーションに伴い、それを代表する乗合バス交通を利用し、伝統的な伝達方式の形態を踏まえながら、情報の送り手本人がその受け手へ直接、情報を口頭で伝える、個人的なパーソナル・コミュニケーションの確立をめざしている様子を明らかにした。ヤップ島でのバス交通に代表されるモータリゼーションは、伝統的な伝達方式を今日に生かしつつ近代化へ順応していく有効な伝達手段となっているのである。

ヤップ島では、社会が近代化、国家化してゆく過程においても、情報の伝達や通信手段はマス・コミュニケーション化しない、という、いわば常識ではない事態が展開

している。民族的思想、適当規模の生活圏などヤップ島固有の事情はあるにせよ、興味深い事例であるように思う。今後の推移を見守っていきたくと考えている。

謝 辞

本論は1973年8月、1981年8月～10月、1983年6月～10月、1984年12月、1986年1月と6月に実施したヤップ島でのフィールド・ワークの結果に基づいている。このうち特に1981年の調査は人間博物館リトルワールドの助成で行なわれた。また1983年の調査は、国立民族学博物館による研究会「国家形成期における放送の社会的役割に関する比較研究」（研究代表者石森秀三、財団法人放送文化基金助成）に基づいている。本論は、特にこの研究の成果の一部をなすものである。本論の骨子は、1983年12月の国立民族学博物館における共同研究会「ミクロネシアの民族文化のエスノヒストリーの研究」（代表者牛島巖）での発表「ヤップ島のコミュニケーション・ネットワーク」、1984年1月のNHKラジオでの放送「南の島にバスが来て」、『リトルワールド年報』への調査報告【小林1985】などを通して形づくられてきた。こうした過程で牛島巖先生をはじめ、実に多くの方々からご教示を頂いた。また特に石森秀三氏には調査時から本論の執筆に至るまでご配慮を頂いた。そしてなによりも、ヤップ島では多くの方々親切にして頂いた。ここでご協力下さいました皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 藤竹 暁
1976 「ラジオ放送」 下中邦彦編『世界大百科事典』 31巻 平凡社, p. 280。
- 印東道子
1984 私信。
- 石森秀三
1984 「『上意下達』から『政治的キャンペーン』へ」 財団法人放送文化基金編『HBF 放送文化基金報』 23: 27-30。
- JENSEN, John T.
1977 *Yapese-English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- 小林繁樹
1978 『ヤップ島家屋の構造と建築過程』 リトルワールド研究報告 2, 人間博物館リトルワールド。
1985 「ミクロネシア, ヤップ」 『リトルワールド年報』 6・7: 3-7。
- LABBY, David
1976 *The Demystification of Yap*. Chicago: University of Chicago Press.
- LINGENFELTER, Sherwood G.
1975 *Yap: Political Leadership and Culture Change in an Island Society*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- MÜLLER, Wilhelm
1917 *Yap*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition, 1908-1910*. II, Band 2-I, Hamburg: L. Friederichsen, de Gruyter & Co.
- OFFICE OF PLANNING AND STATISTICS, OFFICE OF THE HIGH COMMISSIONER
1979 *Quarterly Bulletin of Statistics*. II (4), Saipan, Mariana Islands.
1980 *Bulletin of Statistics*. III (2), Saipan, Mariana Islands.

SKINNER, Mark .

1982 Islanders Economize with On-Time Buses. *Islander* July.

牛島 巖

1987 『ヤップ島の社会と交換』 弘文堂。

矢内原忠雄

1935 『南洋群島の研究』 岩波書店。

YAP INSTITUTE OF NATURAL SCIENCE

1981 *Yap Almanac Calendar 1980*. Yap.

1983 *Yap Calendar & Almanac 1983*. Yap.

YAP STATE GOVERNMENT

1981 *Statistical Yearbook 1981 Yap State, Federated States of Micronesia*. Yap.